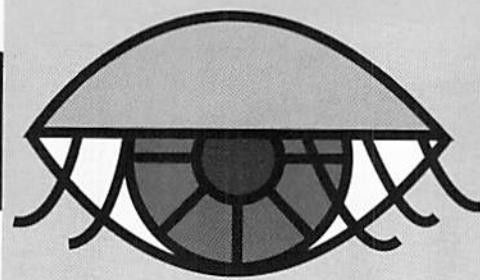
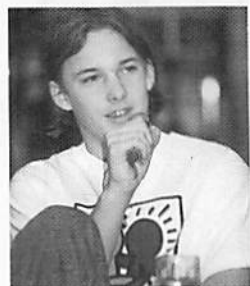


# FAME Report



京都ノゾキ見トピックス



## 清水寺と『マイ・フレンド フォーエバー』。

### HIV感染の少年を描くブラッド・レンフロの新作、京都仏教会の手で上映。

輸血がもとでHIV感染者となった11才の少年デクスターと、彼の病を直すために、幼い知恵をふり絞り危険な冒険の旅に出る12才の少年エリック。ふたりの友情が涙を誘う、ひと夏の物語を描いた映画「マイ・フレンドフォーエバー」(松竹富士配給)が現在公開中である。なんとなくセンチメンタルな邦題が付けれられているが、原題を「THE CUR E (治療法)」といい、AIDSの血液感染に初めて目を向けた内容でもあることから、アメリカで大評判となった作品だ。この「マイ・フレンドフォーエバー」の試写会が、公開よりひと足先の7月に清水寺・洗心殿にて行なわれていた。なぜ清水寺で?との疑問には、この作品を観て深く感動し、今回上映のきっかけを作ったといえる京都仏教会の有馬理事長が試写前の記者会見で語った。「病気は字で読む如く、「気」を病む」ということで、病には肉体的な問題もあるが、精神の問題が非常に大きく作用するものです。個人的にもAIDSには関心を寄せていましたが、誰もがもつと身近な問題として知ることが大切であると思いました。この作品は、そうした絶好の機会を与えてくれる映画です。」また、この会見には作品のキャンペーンのために来日していた俳優ブラッド・レンフロが同席、若きアクターにも数々の質問が飛んだ。今回の役作りはどのようにしたかという点には「僕の役は「AIDSにか

かった可哀相な少年の友達になってあげました」というのじゃなくて、「友達になった少年がたまたまAIDSだった」という役。でもAIDSだからどうだということではなく、自分ならこんなふうな友達に接したい、という思いで演じた。では、日本に来て驚いたことといえば、「全部!! 何見ても「ええ!? ええ!?」ってね。十代にありがち(?)のちよつと小生意気な少年くささを見せつつ、リバー・フェニックスの再来と言われると「光栄です。でもそれは僕の映画のイメージを見て言ってるの? それとも近い将来、彼みたいに死んじやいそうだったこと?」と笑って答えていた。この後の試写会では彼の舞台挨拶が行なわれたが、訪れた観客には知らされていなかったため会場にはかなりの驚きの声があった。

なお、この作品の配給収入の3%は、音楽やイベントを通して幅広い活動を行なっているAAA (Act Again st AIDS) に送られる。古いものを残しつつ、新しいものも取り入れようという姿勢を持つ京都だからこそ、このような活動がもっともっと盛んに行なわれるべきだろう。